

子と名くともある。一として荒誕ならざるはない。しかし、支那民衆の頭を支配してゐるのは、神の正體と來歴とではなく、この神は一家の吉凶禍福を司る神であり、一家の監視者たる責任を有する神であり、そして二十三日もしくは二十四日に昇天して、一家一年を通じての善悪行爲を玉皇大帝に報告し、大帝は善悪行爲を清算した上で、あるひはこれを賞して福を授け、あるひは罰として禍を下すものとの信念だけである。従つて祭事の一切が、それに基いて準備される。最も普通に見る神像には、一體の男神像で、その左右に侍者が善悪としるせる器物(俗には罐であるといふ)をささげてゐるものと、又、男女神並坐して、左右に善悪の二罐を奉持せるものがあり、二種の畫像とも、灶君府と題してある。そして、俗に男神を灶君、女神を灶奶奶とよんでゐる。

る。唐以前には、北俗竈神を稱して竈王といふと書いた隨筆があり、清朝の中ごろ書かれた歲時記に、二像あるものは、これを張竈・李竈といふと書いたのもあるが、少くとも最大多数の今日の民衆には、名などは何等問題を成さない。

竈神を祭るには、第一に畫像。形の上から名けて糖元寶とも

膠牙糖ともいふ。これは神の口を粘らせおき、玉皇の前で多くものいはせぬための企らみから。酒糟、これは飴に代へて、彼を酔ばらばせ、多言することができないやうにと、竈門に塗抹するもの、名けて酔司命といふ。豆餡の米の粉團子で謝竈糰とよぶもの。上天に際しての乗輿、もしくは、これに代へて馬、いづれも張り子の紙製。馬の際には途中の馬料にあつるための青豆などは缺ぐべからざるものである。夜に入りて香燭をともし、

その家の主人うやうやしく叩頭禮拜する。多くの地方では、この際に女をあづからせない。そして、祭主は竈神が餘計なことを上奏しないやうに、辛・甘・臭・辣ともに御内分でありたいと祝する。祭り畢れば畫像および乗物などを携へて門外に送つて出て焚化する。北方の炕あり、大きな烟突を有する地方では、竈神は烟突を傳うて空に上るものとされてゐるが、南方にはない。竈神の再び下界に降るのは、除夕の夜半で、この時はまた迎へるための儀式がある。これに關して教授費孝通は『支那の農民生活』において、農民の竈神に對する心理、超自然王國と人間の行爲との關係、崇神と然らざることとの軌範、すなはちあるタブーの恪守と不恪守などについて、外國人に讀ませるために、極めて明快に、且つ周到な觀察を下してゐる。

。愈淨意話説

いづれにあれ、支那に道佛二教の存在するかぎり、また、善書類をことごとくを灰にせざるかぎり、かりに、かの往年の共産黨の迷信打破運動や、新生活運動が、くりかへしくりかへし行はれるとしても、民衆の竈神崇拜は、その打撃をうけることは甚だ少いであらう。もし打撃を受けるとしたら、その程度は、社會事業と慈善事業との萎靡不振に比例すること必然である。かの善書と稱する勸善懲惡を趣旨とするものは、除外例なく、直接間接に玉皇、竈神崇拜を鼓吹するものであるからだ。一例として周夢顔の『安士善書』に收めた『愈淨意公遇竈神記』の概要を下に引く。明の嘉靖のころ、江西に愈都、字を良臣といふ人が

た。若いころは貧しいので私塾を開いてゐた。そして十餘人と文昌社といふを設けて、惜字、放生、戒淫、口過などを慎んでゐたが、前後七回とも科擧コケイに失敗した。五人の男の子の中、四人まで喪ひ、纔かに第三子だけが育つた。その子は生れながら左の足に二つの痣があつた。と、八歳のころ、どこかに失踪した。彼の妻は、そのために眼を泣きつぶして盲となつた。四十七歳の除夜、盲目の妻と、ただ一人だけ残つた娘の子と、さびしく坐つてゐると、門を叩いて角巾を冠り、黒い服をつけた見慣れぬ男が入つて來た。彼は自ら張と名乗り、貴家の愁歎を慰めるために、不意に伺つたのだといつた。愈が歴年竈疏ツアオスウを焚いて竈神ツアオシエムを祭つてゐることを告げると、張と自稱する訪問客は、私は久しく君の家のことを知つてゐる。君は悪心だ。虚名だけの人だ。竈疏ツアオスウの

竈神訪問

文句は神を怨むので一ぱいである。そんなことでは、まだまだ神罰をうけるだらうと前提してから、いと懇ろに、彼に善行を修めることを訓へた。そして語り畢つて内室に入るかと見ると、彼は竈の前で姿を消した。愈は、この時以來、觀音コウオン大士ダイシに誓願して、毎日清晨に大慈大悲の尊號を百回づつ唱へ、一言、一動、一念、一時、鬼神がその旁に在るが如くに虔んだ。年五十歳、明の萬曆二年、家族と共に入京し、その次の年に進士チンシに中つた。ある日、内監の楊といふを訪ふと、その五人の義理の子たちがみな出て來た。その一人の十六歳になるのを見ると、八歳の時に失踪した彼の子に酷似してゐる。よくたづねると、子供の折に誤つて船中にまぎれこみ、そのまま他地につれ行かれ最後にここに貫はれたのだといふ。念のために左足をあらためると、歴然として二つ

の痣があつた。愈はそれを見ると、思はずわしの子ぢやと聲をあげた。楊も駭いた。楊の家からその子をつれて家にかへり事情を語ると、彼の妻は血涙を流して喜んだが、同時に、雙目また視力を恢復した。愈は、その後、彼の子のために妻を娶つてやつたが、前後七人の子を生み、みな達者に成人した。そして彼自らは、八十八歳の長壽を保つたといふのである。次に現に河南に行はれてゐる祭竈チツアオの際の民歌を附記する。これは三度くりかへして歌ふのである。そして除夕チウツに竈神ツアオシエスを迎へる際には、三丈の長竿にもしくは樹の梢に燈火をかけて、途中で金銭を遺失することがないやうにと心を配る。

一。碗涼水兩棵葱，送我灶爺上天宮，你爺對給他爺稱，就說我家甚是窮，多帶皇糧少帶災，再帶財寶下界來，多帶

跑馬箭，少帶穿針線

四。亂歲日。

二十五日から除夜までを、京津地方では亂歲日ロフスソイとよぶ。わが神無月である。竈神ツアオシエスはすでに上天して、除夜とならねば還らなから、何事も勝手だとの横着な心構へで、この五日内に婚嫁の行はれることが多い。これを百無禁忌といふと、『帝京歲時紀テイキンソイジ』などに見える。山東のある地方にも、二十四日に嫁入りが多く、月末を亂絲日ロフススとなへるとあり、山西のある地方でも、同じく百無禁忌として嫁入が多いといふ。多分、北支那一圓に行はれてゐるのであらう。揚子江筋の諸省でも、割合に農隙の十二月を以てせられることは多いが、歳末をひかへて特に婚禮が

亂絲日

多い傾向は決してない。民間通行の曆本を按ずると、十二月を
通じて忌嫁娶チヤチニと明記されてゐる日は二日。凡事不吉とある日
が二日。餘事不宜とある日が二日。大體において十二月は吉
日が多く、特に二十日以後は、一日だけを除いて吉日が多いので
ある。かやうなことも、亂歲日ロウソクイの婚嫁に關係があるかも知れな
い。

五、接玉皇チエユイホワン

十二月二十五日。俗に玉皇ユイホワンが自ら天上から降り、竈神ツアオツエヌの報告
について、その人間の一年を通じての行爲が、果して報告通りな
るや否やを確める日だといはれてゐる。そのため、舊式な女の
多い家庭などでは、うやうやしく香案を設けて迎へたてまつる。
下降稽查

これを接玉皇チエユイホワンといふ。また、かかる家では、一家の禍福のかかは
るところであるから、特に齋戒して素食をとり、起居をも言語を
も慎み、家長主婦は、召使や子供にも、堅く罵詈雑言を禁ずる、不祥
を招かんことを恐れてなりと、各種の歳時記が一致してゐる。

女人の毒
舌警戒

些々たるつまらぬ事から、女同士で口論を始めたとしても、二時
間や、三時間は、衆人環視の間で、實にさまざまな奇想天外の、そし
て到底文字では書けない悪口が放げ交はされる。敵手の悪徳
を暴露し合ふ。その言の中には、身ぶるひをするやうなのが
ある。しかも、この悪口雑言は下層ばかりでなく、すべての階級に
共通する現象であると、例のカール・クロウは、特に一章を設けて
述べてゐる。又、支那人である魯迅ルシユイヌも、彼の同胞のこの畏るべき
民族的特異を國罵クオマと名けてゐる。その國罵を今日一日だけ禁

國罵

するのである。但し民間通用の農曆などを見ると、十二月二十五日は宜すなはち大吉で、祭祀、祈福、求嗣から、官吏の赴任、臨政、結婚、移轉、裁衣、修造にいたるまで、一切合財の行爲が、忌禁から解放されてゐる。悪口だけが禁ぜられるとは、支那においては何れも一の不思議だ。

六、信仰生活斷片

胡適の『四十自述』の中から、以上の二三項に聯關したものを、斷片的に抜き出してみる。彼の郷里は安徽省で、中流以下でない士人の家に生れたのである。

僧道無用

門に貼られた寺方道士無用の眞つ赤な紙が、だんだん桃色になり、それから白地となり、とうとう剝げてしまつたのを覚えて

信心家たち

る。家中の女たちは、皆な大變な信心家だつた。その信心の音頭とりは、星五叔母であつた。この人は年老いてから、長期精進をし、佛を拜み、經を讀んだ。誰もこの叔母にやめさすことはできなかつた。その中に、二兄の嫁の母がそれに加はつた。この二人の婆たちは、いつも家中何人かの婦人へ、佛を信心せよと勧めた。とうとう、家に病人ができたりすると、この人たちに頼んで、讀經、願掛け、願ほどきをしてもらうことになつた。

二兄の嫁の母は少しばかり文字が讀めた。で、『玉歷鈔傳』や、『妙莊王經』などのありがたい本をもつて來ては、私どもに、蓮救母の話や、妙莊王の姫君すなはち觀音出家の話などをした。又、村の芝居で、觀音出家の場面も見た。

母は、故郷の風俗に従つて、私を觀音菩薩のお弟子に差上げ、法

観音へ願
かけ

名までつけて下さった。母はある年、私のために願をかけられた。平癒の後、私をつれて古塘山に参詣された。山はとても歩くに困難だった。母の足はこのために、その年中うづきつづけた。しかも、登る時、母は一言も辛いといはれなかった。

孔子像禮
拜

母から、毎日孔子を拜むやうにいひつかつた。母は私に名をあげてほしかつたのである。塾の先生の家の壁には、赤刷りの吳道士筆の孔子像が懸けてあつた。そして私たちは、放課後には、いつもその前で禮を一つさせられた。私は、姉の家に年賀に行つた時、孔夫子を祀つてある厨子に目をとめた。それは紙箱でつくられて、紅紙の位牌、燐寸箱でこさへた祭壇、その壇上には金紙の香爐、燭臺、供物が貼つてあつた。また、厨子の外側には、紙でこしらへた聖廟の額とか、聯とかが澤山貼りつけられて、徳

配天地・道冠古今。といったやうな對句が書いてあつた。

長兄の嫁と、二兄の嫁とは、不機嫌な時には、子供を打つたり、叱つたりして腹癒せした。打ちながら、とげとげした實に酷い言葉で叱りつけながら、わざとそれを他人にも聽かせるのである。母は辛抱をしきれないと、こっそり門を出て、しばらく他家で世間話をした後、又こっそり歸へつてお出でになつた。この兄嫁たちは、一度腹を立てたら、十日も半月も腹立ちつづけてゐることがあつた。毎日、つんけんした顔で、口をくひしばつて歪め、そして、また子供を殴りとばした。母はひたすらこらへてゐた。それでも、たまらなくなると、床から出ずに軽く一べんに泣いてしまふ例であつた。

半月も立
腹つづけ

七、械闘^{シエトウ}。打冤家^{タユアヌチヤ}。

集團鬭争

福建、廣東の東南海一帯にかけて、その沿海地方と山地とを問はず、頗る殺伐で、また、非文明極る集團鬭争で、械闘^{シエトウ}と稱するものがある。數世紀前まで、おのおの異つた民族が、反覆して集團移住し、前からそこにゐた先住民族と、死を賭して地を争つた遺習であるらしい。清朝時代には、堅くこれを禁じ、禁を犯して鬭争するのがあれば、軍隊を急派して彈壓を加へたりしたが、流血の

彈壓無効

慘事は一向に已まず、刀槍の外に小銃まで持出して部落と部落とが、互に仇殺したものである。今日は、この蠻風もやや下火となつたが、それでも決して根絶したのではない。清朝の黃霽青なる大守が、潮州風俗を樂府とした十首の中にも、『打冤家^{タユアヌチヤ}』と

潮州樂府

いふがある。打冤家は械闘^{シエトウ}のこと。打冤家何の怨かある。怨あらば何ぞ官衙に訴へざる。睚眦^{サイシ}輒ちに兵を相加ふ。壯丁前に在り老弱は後に、籐牌鳥鎗卒然として湊り。今日鬭ひ。明日も鬭ふ。彼は胸に洞あけ。此は脰^{シユ}首頸に同じを絶つ。一鬨紛紛として怨獸の如しと、その上半に歌へるのは、詩人の誇張でも、文飾でもない。現に廣東の南海縣といへば、決して文明の風が吹かぬ僻地でもないのに、三州坑から少し距てた山村には、毎年十二月三十日の晩、翠薇村と塙邊村といふ二部落が、定期的に壯丁を繰出して、一座の獅山といふ丘陵の頂で、鎌、矛、刀を武器として相接觸し、わめき叫んで血の雨をふらし、臂を斷ち、腿を折り、大勢すでに決すと見れば、また明年の今夜を期して、負け色の方がさつさと退却する實例がある。これは民國十三年の『民俗^{ミヌスウ}』に見えた記事に據る。

定期械闘

かりに廢れたにしろ、それは極く新しいことである。

八、歲末^{ソイモ}—除夜

三元は歳の元、月の元、日の元をいふ。且は朝なり、三朝は歳の朝なり、日の朝なり、三始ともいふ。且は一日の初にして、元旦は一年の始めなりと、古書には見えてゐる。又、元旦を大^タ年初^{ニエヌキイ}一^イなどとも書いてある。けれども、支那の元旦の儀式からいつても、おそらく、彼等の感情の上からいつても、元旦^{ユエヌタヌ}は除夜の連続でしかなく、除夜と元旦とを引つくるめて過^{クオ}年^{ニエヌ}とよび、新舊送迎の時に重點をおくのが、争へない實際である。だから、叙述の上からしても、除夜、元旦を過^{クオ}年^{ニエヌ}なる一題目の下に卷首におくのを便宜とする點も多いが、ここには曆面に従ひ、過年を二項に分つて、卷

首と卷尾とにおく。

守歲^{ソウサイ}—諸準備

除夜は、越し方の舊い一年を送つて、光明と希望に満ちた一年を迎へんとする時であるから、老いたるものには、まことに感慨深い夜であり、壯なるもの、幼きものにとつては、歡喜を禁じ難い時である。いろいろな準備、いろいろな行事もあるから、主人、主婦、召使まで終夜寝る時がないのも實際ではあるが、樂々と寝ね得る時を有するものも亦た寝ねずに明かす。これを守歲^{ソウサイ}と稱する。

拜官年
清朝時代には、この日、天子正殿に出御して、文武の賀禮をうけられた。これを拜官年^{バイコワンニエヌ}といつた。士人もまた恩顧ある人々へ、

辭歲^{ツクシ}とて挨拶に行き、あるひは家に宴席を設けて往來招邀した。今も若干の遺風はある。けれども北京以外にはまづ見られない。

富めりとはいへぬまでも、貧しからぬほどの家ならば、遅くと

も暮の二十三日(江南は處によりて二十四日に)の竈神^{ツクシノカミ}を祭ること

ろから、迎春の準備にかかり、年禮^{ニエスリ}すなはち歳暮の贈物を調へ、正

月を休み通す期間に相當した。年菜^{ニエスツアン}すなはち日用食料品を買ひ

溜めし、室内所々に貼りつけて奉祀する繪紙の類すなはち年畫^{ニエスホワ}。

と稱するものと、春聯^{チュンレン}の大小幾種、爆竹^{パオツ}などをも買つておくから、

戶外へ出る用事は少いとしても、家内の用意が一通りの忙しき

ではない。林語堂^{リンゴトウ}の『小批評と小品』から、彼の幽默^{イウモウ}。たつぷりな

十數行を抄譯しやう。彼の日附は陽曆。

年禮
年菜
年畫

林語堂の
小品

『私の偉大な科學精神は、舊正月を祝ふなと命じた。で、私は彼と約束した。早くも一月の初めから前ぶれの雑音が聞えだしてゐたからだ。ある朝、食卓に臘八粥^{ラハチヤウ}が出た。蓮子^{レンシ}と龍眼肉^{リョウガンニク}を入れたものだった。私は今日は十二月八日だったなと思ひだした。一週間過ぎたら、召使の男が、ボーナスの先拂を要求した。これは除夕^{トシノイ}に支拂ふべきものであつた。二月一日と二日に、郵便配達と牛乳屋と、書店の小僧に、心附をやらねばならなかつた。二月三日となつた。家内が私にシャツを着更へよといつた。理由をただすと、家内は、女中が、今日も、明日も、あさつても洗濯しないからといふ。人道の上から私はいけないといへなかつた。朝飯をすますと、家内は銀行に行かざるを得なくなつた。政府の命令で、舊正月はなくなつてゐる筈なのに、人みなが銀行に押

しかけて、取附騒ぎの噂さへ傳つたからである。家内は、ねエあなた、あなたも、一緒に自動車で行きませうよといふ。(彼は、かくして子供等と外出し、城隍廟へ行つた)家に歸つて來た時には、廻り燈籠、兎の形した燈籠、いくつもの玩具の包み、おまけに梅の花まで抱きこんでゐた。そして故郷の友人から水仙の鉢が贈つて來てゐた。その日の午後三時ごろには、二斤半ほどある大きな年糕をかかへて、私はバスに乗つて我が家の方へ向つてゐた。五時になると、私はその油揚げを食つてゐた。これは飛んでもないことになつたと、私は氣がついた。そして大晦日の祝だけは決してしないぞと、私自らに斷乎として申しつけた。と、五時半に、末ツ子の娘が、紅い着物を着て出て來た。六時ごろには、煖爐の上に赤蠟燭がともされた。燃へだした蠟燭の火が、あだ

かも私の科學的精神に勝ち誇るかのやうに。』

家堂とも、祠堂ともいふ神聖な建物を、邸内に設けてゐるほどの家ならば、その建物を清掃して先祖代々の影像をかけねばならぬし、祠堂を有せずして、屋内の廣間の一つを代用するものは、その廣間にかけてねばならぬ。煤けてまつ黒な板壁、土壁に買つて來た神像を、無造作にぺたぺたと貼るだけで足るほどの中以下の家ならば、その手数はかからないが、中以上の家ならば、大概は、客間すなはち正廳の正面にあたるところに、關帝、觀音、財神を、一位づつ三龕に別けて奉祠してゐる、三龕に分たざるは、これを一龕に納めてゐるから、この神龕の整頓、香花、供物の準備も斷じて遅くなつてもならず、勿論、忘れてはならない。そして香燭をささげた後は、接香とて一夜を通じて、香の火の絶えざるやう

に氣をつけねばならない。この三體の神佛に對する信仰には、甲乙の差はないだらうが、商家はもとより財神として關帝を正座にし、商家にあらざるものも、關帝を中にし、觀音をその左に、玄壇神もしくは五路財神を右にする慣例のやうである。觀音を特に祖師として祭る玉石職人の如きもあるけれども、この場合の觀音は、佛中の佛、菩薩中の菩薩としてである。關帝も、玄壇神も、財神前に解説した)として同じであるが、この場合、關帝を王爺と尊稱してゐるのを考へると、廣い意味での神中の中、狭き意味でも財神中の財神とするのであらう。

それから接神の諸儀式に必要な諸準備。

洒掃——入浴

大掃除

夜に入るまでに、家の内外の汚物、塵芥を遺すところなく掃除する。(大抵は冬至後の一日を擇みてしてはゐるが)人の眼に觸れざる仄暗の處にも穢器を置かず、誠敬の意を示すべしと説かれてゐる。普通の家では、正月の二日には、早くも地を掃き、水も汲むが、少くとも元日だけは、掃除をしない慣はしであるからだ。昔は、暮の大掃除も吉日を擇んでし、元旦は、財氣を失ふからとて殊に戒めて地を掃かず、水を汲まず、火を乞はず、さらに針剪することすら禁ずるものがあり、最も甚だしきは臺所の刃物まで仕舞ひこみ、五日までも堅く掃除を戒めたといふことで、今でも、地方郷村には、この俗が幾分遺つてゐる。

入浴は、中南支那においては、日常のことで珍らしくも何ともないが、殊に除夜のは、除穢氣として、精進潔齋の意で入浴する。そ

地を掃かず
水を汲まず
火を乞はず

除穢氣

して諸儀式が始るまでに、男女とも衣服はもとより、靴も帽子も襪も、みな新しいものに取り換へ、時のいたるを待つ。

押。歳。錢。

この夜と限るのは、北方の俗であるらしいが、中南支那をおしなべては、暮の三四日前から、親類や友人の子供が来るのがあれば、もしくは、その訪問先の家で子供の姿を見かければ、祝儀として押。歳。錢ヤソイ、チエヌ（壓。歳。錢とも）といふを與へる。特に意を用ゐて赤い紐で文錢を首からかけて胸に垂らすやうにし、それに長生チン、シヤン、クオ。果すなはち落花ホワ、フオン。生コイ、ユアヌ。桂カヌ。圓ラヌ。橄欖などの果物と菓子とを添へて贈る地方もある。この際、錢の數は必ず偶數とする。（三十年前は文錢を百か二百くらゐであつた。）果物も長壽多子孫の意を有するも

押。歳。錢

のを擇ぶ。けれども、かやうに念入りな押。歳。錢ヤソイ、チエヌの贈答は、田舎を除いて、中南支那の開港地などでは滅多に行はれなくなつた。かりに與へるとしても、枚數などを問はず、小銀貨の紅い紙につつんだのをやる。押。歳。錢ヤソイ、チエヌは、元旦に子供や、召使たちなどに與へる賞。錢ツァン、チエヌとか帶。歳。錢タイ、ソイ、チエヌとかいふのは別物である。この外、歳末には、風呂屋、散髪店、自動車屋、便器掃除人にまでチップがある。郵便電報の配達人などの押しの強いのは、クリスマスからこのころにかけて、カムシヨウカムシヨ（コンミツシヨンの廣東訛り）の要求に來る。

賞。錢。と。は。別。物

カムシヨウ

家の内外の掃除をすました後、門。神メン、シヤンや、春。聯チウ、レンの類をとどころに貼る。北方では、これを年。紙。供。張ニエヌ、シヤン、コウ、ヂヤンを畢るとして、極めて重要な除。夕チウ、シヤンの事務の一としてゐるが、南方ではそれほどに重きをおい

年紙供張

てゐない。殊に大きな都會では、家の建築様式が洋風化し、家具も従つて新しい型が好まれ、人の氣分もまた古風ではないからである。ただ、廢れては行くものの亡びきつたのではない。江浙の郷村などには、舊慣依然たるにかへつて驚くこともある。

門神——春聯

門神は、一家の門を護りて、惡魔を拂ふ二柱の神である。この畫像を門の扉の左右に貼付する。左右相對して、同じく戈を執り、劍を佩び、武裝に身をかためてはゐるが、面の色白く、鬚髯の長く垂れてゐるのが神茶。面頰く、虎鬚いかめしく、眼をむいてゐるのが鬱壘。貧家の一枚戸にして、門扉の兩側に貼りたくても貼るを得ざるものは、正座兒とも、獨座兒ともいふ。壽星や、財神

神茶・鬱壘
壘說

正座兒

像を一枚だけで間に合はせる。神茶鬱壘の二神は、度朔山の桃樹の下にあり、よく鬼を執へて、鬼どもに畏れられた。で、後世、この二神像を畫き、戸に懸けて百鬼を禦ぐことになつたとある。

秦瓊・敬德說

これは『風俗通』に基いた通説であるが、他の一説によると、唐の太宗の時、ひどい旱魃で人民が苦しんだことがあつた。宰相魏徵といふが、龍王と約束して、所定時間に雨を降らさねば、おれが眠つてゐる時に上天して、ささまの首を切るぞといつた。魏徵は、皇帝と圍碁中、ほんの一瞬時、睫を合はしたかと思ふと、もう上天して龍王の首を切つた。大雨は沛然として下つた。が、龍王はこのために太宗を怨み、隙あらば彼に仇せんとした。その時、彼の側近く召されて警護させられたのが、敬德に尉遲恭と秦瓊(一に秦叔寶)との二武將であつた。これが二門神の由來だ

白臉兒・
黒臉兒

と。いづれが當つてゐるかは、もとより解らないが、假りに後説に従ふとしても、千三百餘年來の古俗である。民衆は委細構はず、ただ、顔の白い方を白臉兒バイリエル、赤黒い方を黒臉兒ヘイリエルとよんでゐる。春聯チュウズリエスは對聯である。大明タメスの兩扉にも、門の上の横木にも、人の過ぎるところ、處るところ、家内戸外いたるところに、長短の對句を書いて貼れるものこれである。今は、むかし桃符といつたのも春聯チュウズリエスを以てよぶやうになつてゐる。民國に入つた後の僅か三十年間にも、都會地は、時代思想に影響されて、春聯の數は減じたこともあつたが、結局、大したことはなく、かへつて白話文で屬對するなど、時勢即應の面白いのもできて、支那の正月氣分を味ふには、今日もまた春聯チュウズリエスにかぎるやうになつてゐる。春聯の起原説にはいろいろあるが、後蜀の孟昶の桃符板に題したのが最

春聯起原

も古く、明代説は信するに足らないといふが定説である。色は普通赤の一色で、たまに白もしくは淡い藍色を用ゐてゐるのは、喪に服してゐるもので、佛寺道觀は黄を用ゐてゐる。あらゆる階級、あらゆる職業、これを貼らざるはなく、その貼る人と、その場處とに相應した文句とを題する。通りがかりの顧客の需めにより、吹きさらしの街頭に筆を揮ふ私塾の先生や、休暇中の學生の小使錢を稼ぐのは、市中で各處に賣つてゐるのと同じく、聯の文句も聯對作法とか、聯對集成といつた書により、多半は陳腐な常套文句に限られてゐるが、それでも中には驚くほど巧妙な文句がある。名ある文人で且つ能書家に、特に依頼したのはもとよりいふまでもない。嚴密にいへば、聯對の作法には、諧音、偶句、修詞などの體制があり、楹帖といひ、楹聯といひ、一代の文士とし

種類と稱呼

て聞えた蘇軾、眞徳秀、朱熹さへ腦漿を絞つたものといふ。が、故
 事などは一切省略して、ここには、現代通行の種類と稱呼とを舉
 ぐるだけにして、貼用場處によりて區別すれば、大約六種である。
 門心メヌシヌは大門の兩扉に張る一對。框對コワントイは大門の左右の柱に貼る
 一對。横披ホンピは扉の上の横木に貼るもので一枚。斗方トウフワンは屏門も
 しくは垂花門シヨイホウとよばれる大門内の四枚扉の門扉に、それぞれ一
 枚づつ、方形に切つた紅紙へ一字を菱形にかいて貼るもの。抱バオ
 柱チウは廂房客廳シヤンファンの柱に貼るもの。春條チウニョウは室内に貼るもの。以上
 を引つくるめて春聯とよんでゐるが、その外にも、斗方トウフワンに類似し
 た四角な紅紙には、すかひに福の一字をかいたのを、戸にも、門に
 も、あるひは水桶にも、荷車にも貼る。これは對聯を略式にした
 ものとの説がある。又、吊錢テイヤオチエヌとも、掛錢コウチエヌ、花聯ホワリエヌともよぶ鏤刻した

掛錢

欠

欠

昭和十六年十月五日發行

著作權所有

不許複製
初刷0001-3000

日本標準規格B6
定價壹圓

著者 澤村幸夫

發行者 田中慶太郎

印刷者 高田壬午郎

印刷所 株式會社開明堂東京支店

發行所 東京市本郷區本郷二丁目二番地
文求堂書店

配給元 東京市神田區淡路町二丁目九番地
日本出版配給株式會社

會員番號一〇二八〇五一
振替口座東京二一八番

現代實用支那語講座 各冊分賣 定價金壹圓 十拾貳錢

第一卷	基本篇	神谷衡平 有馬健之助	第十卷	戲曲篇	宮越健太郎
第二卷	會話篇 I	內之宮金城	第十一卷	年中行事篇	澤村幸夫
第三卷	會話篇 II	土屋明治	第十二卷	俗諺篇	田島泰平 (以下續刊)
第四卷	會話篇 III	土屋中一	第十三卷	口語文語 對譯篇	有馬健之助
第五卷	時文篇 I (公牘章程)	宮原民平	第十四卷	陣中會話篇	陳白秋
第六卷	作文篇 清水元助	有馬健之助	第十五卷	商業會話篇	文夢我
第七卷	時文篇 II (一般時文)	井上翠	第十六卷	讀本篇	岩井武男
第八卷	尺牘篇	諸岡三郎	第十七卷	上海語篇	陳文彬
第九卷	小說散文篇	奧平定世 松枝茂夫			

417
431

終

